九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

大学演習林の研究上の使命

佐藤, 敬二
九州大学農学部林学科 : 教授

https://doi.org/10.15017/1456183

出版情報：演習林研究経過報告. 昭和39年度, pp.1-1, 1965. 九州大学農学部附属演習林
バージョン：
権利関係：

論　説

大学演習林の研究上の使命

佐　藤　敬　二

大学演習林が林学の教育と研究の場であることは，いまさら改めていう迄もないことであるが，その研究上の使命について考えてみると，次のようなことが主要な点ではないかと思われる。

第1に経営の合理化に役立つ研究であることである。具体的には，われわれに託されている森林を，その地方の経済的ならびに自然的な立地条件に最も適した，そして最も効率的な施業仕組に秩序づけるために役立つ研究が望ましい。民有林はもとより，国有林経営の模範となるような林業経営法をうち立てることが理想であろう。現実をしつかり把握しながら，将来起るであろう事態をも見越して，安全，確実，しかも安定した恒続的な生産が期待されるような経営体はどうすれば実現できるか，そのような研究こそ前向きの研究というべきではあるまいか。

第2に総合された技術の研究であることである。断片的な研究ももとより必要であるが，林業経営のなかでは，それぞれの技術は相互の連関と協調のもとにおいて，始めてその十分な効果を発揮できるものである。その意味では大学にはそれぞれの専門家が揃つているので，横の連絡をとり，関連の知識を動員しながら，研究の実質的成果があがるような方法が採られることが望ましい。このようにして独断と独善とを排除し，研究の無駄を省きたい。欲をいえば，九大演習林として，いま何を研究することが，最も緊急であり，最も切実であるかを考えて戴ければ，これに越したことはない。

第3には，林業の長期性に徹した研究であることである。国をはじめ都道府県の研究機関には，それ独自の所属林地をもたず，林木の一生を通じての長期研究ができるのは，ひとり大学演習林あるのみである。われわれはこの特典を十分に活かして，現実の森林において，伐期まで見とどける研究に取りくむべきではあるまいか。そのためには試験地現場の確保はいうまでもなく，記録の整理についても「長年月」と「担当者の交代」に耐えうる態のものにして置くことが大切である。過去の実情からして，われわれの猛反省すべき事項だと思う次第である。有終の美とは，われわれ林業試験に従事する者のためにある言葉のように感じられる。

以上，わかりきつたことばかりではあるが，私見を申述べることを許されたい。